

B—90 合成繊維の消費実態（第1報）
—セーター類の購入について—

昭和女大短大 刑部 昭子
岡野 都
椎名 米子
○小ノ沢 治子
岩佐 純代
齋藤 幹子

1. 戦後合成繊維の進出により、衣生活は著しい変革をみた。以来20年、われわれの生活の中に浸透し功罪の評価もようやく定まりつつある現在、その利用度はどのくらいか、消費者としての選択意識の所在はどこにあるのかなどの実情を把握することを目的として本調査を行なったので報告する。

2. ①調査時期 昭和42年3月。調査対象・部数 あらかじめ職業・身分を13項目に区分し本学学生を通して全国的に4800部を配布し、聞き取り調査を行なった。

②購入について、所持数、購入年、購入場所、購入者、購入動機、着用目的、価格、品質表示について性別、季節別、職業・身分別に考察を試みた。

3. 冬物より夏物の平均所持数は少なく最も少なく、最も多い職業婦人でも2枚弱、児童の所持数は少ない。品質表示は知っている人が多く、婦人の関心度が高い。表示があったのは冬物より夏物に多く、これは購入年が新しいためで表示法が年々進展して行ったことを示す。しかし、縫つけ表示が少なくラベルによる表示が多い点、表示が不正確と答えたものがある点問題がある。繊維は、冬物は純毛が半ば以上を占め夏物は混紡が多い。取扱い説明はついていないものが多く、ついては割合は3分の1ぐらいである。消費者として取扱い説明に従い妥当な管理をすることが、ことにセーター類の場合望ましいので、その方面の適正化促進への目標としてとりあげたい。